

『自負と偏見』

——アイロニーと個性——

海老池 俊治

一

ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775—1817) の代表作の一つ『自負と偏見』 (*Pride and Prejudice*, 1813) がもともと『第一印象』 (*First Impressions*) という題名で一七九六—七七年に書かれたものであることは、よく知られている。⁽¹⁾そして、また、その題名の変更がバーニー (Frances Burney, 1752—1840) の『セシリア』 (*Cecilia*, 1782) に由来するらしいことも指摘されている。⁽²⁾『セシリア』の第十巻第十章 (最後の章) に、“PRIDE and PREJUDICE”と大文字で、三度繰り返し返して、この言葉が現われるのである。

そのように目立った形で頭韻を重ねた句が繰り返されているのであるから、バーニーを愛読していたオースティンがそれに気づかなかったはずはなく、『自負と偏見』と題名を変更したとき、『セシリア』を念頭においていたことは、間違いないまい。いや、『自負と偏見』が『セシリア』に負うところは、ただ題名の借用に止どまらず、内容的にもかなり大きかったようである。前者 (『第一印象』) の着想は本来「セシリアの物語を写實的に書き直すこと」であった

と主張して、その論証を行った学者がある⁽³⁾。

が、それにしても、『セリシア』中の“pride and prejudice”という句は、オースティンばかりでなく、当時、広く小説読者の注意をひいた形跡がある。二人の婦人がそれを引き写して書き留めたことを、チャップマンが記しているが、十八世紀末にかなり有名であった二、三の小説のなかに、この句が散見する。“pride and prejudice”は一種の流行、とはいえないまでも、文学畑の通有的な観念であつたらしい。で、それがどのように「通有」であつたか、といえ、まず“pride”と“prejudice”を原則的に二つに分けて、それぞれ主人公と女主人公に当てはめた『自負と偏見』の場合とは違って、それらがひとつの観念にない合されていることである⁽⁵⁾。

『セリシア』の“pride”とは根本的に高い社会的地位にたいする空虚な「自負」を、“prejudice”はそれに伴う誤った判断を意味するのであるが、たとえば、シャーロット・スミス(Charlotte Smith, 1749—1806)の『古い莊園館』(The Old Manor House, 1793)第三巻第五章中の、次のような例も、基本的に同様の意味に使われている——

...but now, as he approached his town-house, and saw those bright eyes no longer, these flits of half repentance, originating in pride and prejudice, recurred with more force...

文中の“he”はトレイシー將軍(General Tracy)という老漁色家を指している。彼は主人公の妹イザベラ(Isabella)の容色にひかれて、彼女につきまとつたが、正式に結婚するよりほかに思いをとげる方法がないことを悟って結婚を申し込んだ。が、イザベラが自分の家に入出入りする葡萄酒商の姪に当るので、その結婚によって体面を傷つけることを恐れているのである。

また、ベイン (Robert Bage, 1728—1801) の『ヘータイムス・ロン・ヘン』(Hermesprung, 1796) の第二卷第七章には、次のようにある——

Of the subjects of conversation the evening produced, one was Miss Campinet. Mrs. Garnet had never seen this young lady. She had heard her spoken of, indeed, much to her praise. Mr. Glen was profuse in her applause, and excited in Mrs. Garnet the tenderest wishes. To love, and to be loved by a relation so amiable, so benignant, she said, was all that was now wanting to complete her felicity. But the tender interest they had in each other was torn asunder by pride and prejudice; and this pride and this prejudice, she feared, had been infused into the tender mind of Miss Campinet.

この小説の主人公はハームズブロングと名乗っているが、実は、世俗的な、「傲慢」なグロンデイル卿(Lord Grondeale)の甥であり、その娘キャンピネット嬢と恋仲になりながら、叔父の「偏見」にたてついて、社会的正義を主張している。ガーネット夫人はグロンデイル卿の叔母に当るのであるが、商人と結婚して、寡婦になり、零落し、甥に蔑視されている。グレン氏はハームズブロングに味方する卒直な青年である。引用の個所の“pride and prejudice”という句が直接『セシリア』の句を借用したのかどうかはともかくとしても、用法上、それと揆を一にするものであることは、明かであろう。

なお、次章(第八章)で、ガーネット夫人を訪問せよとキャンピネット嬢にすすめるハームズブロングに、父が許さないと彼女が答える、次の個所は、右の句の意味を強調したものであろう——

“But surely it may be wrong to do a right thing, when prohibited by a father.”

“What, if that right thing be a duty also, and the prohibition pride, prejudice, or caprice?”

この物語は、全篇の趣旨が、明瞭に「偏見」のない社会的正義の主張であり「ゴッドウィン (William Godwin, 1756—1836) の有名な『ケイレブ・ウィリアムズ』(Caleb Williams, 1794) にならった——少くとも、それと同様な発想に基づく社会小説である。したがって、こゝで作者がその “pride” なり “prejudice” なりの語をこゝから借用したにみせよ、それは社会生活にたいする問題意識に支えられてゐるのである。

いずれにしても、これらの語法のなかで “pride” に並んだ “prejudice” は、その意味を補足してゐるのであるから、語義の中心は “pride” にあるわけであろう。そういへば、そのこゝで、小説の「人間」につらつ “pride” という観念を持ち出した興味深い発言がある。一八〇四年に出版されたリチャードソン (Samuel Richardson, 1689—1761) の書簡集の序に、『ペッラ』(Pamela, 1740) を論じつゝ次のようにある。“Her master” とはペッラの主人 B 氏である

Her master at length, after many ineffectual attempts to vanquish her resistance, begins to relent, professes honourable love to her; and, after a severe struggle between his passion and his pride of birth and fortune, offers her his hand in marriage. Pamela acknowledges her love for him, and accepts (almost upon her knees it must be allowed) his proposal.

最初のイギリス小説といわれる『ペッラ』の主題が、「情熱」と門地財産の「自負」との葛藤によって展開した、い

いかえれば、イギリスの小説は、ひとつには、社会的関心の人間的反省によって始まった、というこの主張は、当時、一般に認められた考えであろうと思われる。筆者バーボルド夫人 (A. L. Barbauld, 1743—1825) は幾分常識的ながら、健筆な文学解説者であったからである。

たしかに、リチャードソンは社会生活についての関心が大きいのである。彼の小説は発生的に庶民の文学であり、中流人の生活意識と倫理感に満ちている。小間使の少女が清純な節操を貫き、そのために主人の愛をかちえて、紳士社会に仲間入りをしたという筋の『バミラ』は、早忽のうちに期せずして出来上った処女作らしく、作者の主張が露骨すぎるといわなければなるまい。が、彼の代表的傑作『クラリサ』(Clarissa, 1747—8) も、構想と趣旨の点では、まったく『バミラ』にひとしい。この作品は、社会的階層の差に基づく二つの異った生活原理の対立を、物語の基本に踏まえているのである。

女主人公クラリサの悪縁の相手ラヴレイス (Robert Lovelace) は、自身かなりの財産を持っているばかりでなく、貴族の甥であり、その推定相続人である。彼の明敏な才智と優雅な容姿と放蕩な所業は上流社会の風儀を代表している。ラヴレイスの生活信条は上流的な「名譽」(honour) である。それにたいして、クラリサは裕福な田舎紳士の娘であるが、彼女の一家は財力を生活の基礎と信じ、中流的な謹直さとその力を誇りにしている。クラリサの「美德」(virtue) は根本的に中流人の道德感に基づいている。この物語の悲劇は、しょせん融合しない二つの社会的階層の標語、「名譽」と「美德」の相剋と、したがって、また、それぞれにたいする人間的な「自負」の葛藤から生じるのだといえるであろう。

クラリサの友人ハウ嬢 (Anna Howe) が彼女にあてた手紙のなかで、ラヴレイスについて次のようにいっている

He is naturally proud and saucy. I doubt you must engage his *pride*, which he calls his *honour*: and that you must throw off a little more of the veil. (II, Letter XXXIV.)^(e)

その「自負」はクラリサの目には空虚に映らないわけにいかない。たとえば、彼女が打ちとけてくれないとラヴレイスがこぼす事情を、クラリサはハウ嬢に書き送って、次のようにいっている——

Silly and partial encroacher! not to know to what to attribute the reserve I am forced to treat him with! But his *pride* has eaten up his *prudence*. It is indeed a dirty low pride, that has swallowed up the *true pride*, which should have set him above the vanity that has over-run him. (II, Letter XCVI.)

一方、ラヴレイスから見れば、クラリサの「美德」は、ことにその生まれを考えると、むなしに「自負」の産物にすぎない。それを打ちこわすことが彼の目的なのである。彼が友人にあてて書いた次のような不遜な文言が、右に引用したハウ嬢の言葉のすぐ前にある——

Is not, may not her virtue be founded rather in *pride* than *principle*? Whose daughter is she?—And is she not a *daughter*? If impeccable, how came she by her impeccability? The pride of setting an example to her sex has run away with her hitherto, and may have made her till *now* invincible. But is not that pride abated? What may not both *men* and *women* be brought to do in a *mortified state*?

What mind is superior to calamity? Pride is perhaps the principal bulwark of female virtue. Humble a woman, and may she not be *effectually* humbled? (II, Letter XXXIII.)

リチャード・ソンの第三作『サー・チャールズ・グランディソン』(Sir Charles Grandison, 1753-4)は、主人公と女主人公とのあいだに、『クラリサ』のような対立がない。裕福な従男爵サー・チャールズの家柄は由緒正しく、彼の母は貴族の娘である。したがって、父も母の兄も情婦を持つような上流的放埒さを免れないが、サー・チャールズ自身は高潔、謹直であり、善意と良識に満ちている。女主人公ハリエット (Harriet Byron) は古い堅実な中流の家に生まれて、クラリサと同じく「美德」を信条にしているのであるが、クラリサと違って両親がなく、自由に結婚相手を選びめることができる立場にある彼女も、偶然のことから近づきになったサー・チャールズの人柄を、ただ崇拜するほかない。

物語の筋が紛糾するのは、主に、サー・チャールズを慕うイタリアの侯爵令嬢クレメンティナ (Clementina della Portetta) が、彼とハリエットとのあいだに介入するからである。もっとも、実は、クレメンティナはハリエットよりも先にサー・チャールズと知り合っているのである。が、物語の趣旨にしたがって、サー・チャールズとハリエットがめでたく結婚するために、クレメンティナの恋は、当然、破れなければならず、全体として明るい健康なこの物語の喜劇は、その限り、『クラリサ』のような悲劇の型をうちに包んでいる。

その「悲劇」は宗教の対立によってひき起される。クレメンティナとその一族がイギリスの従男爵にどんな身分上の「偏見」を抱くにもせよ、サー・チャールズの人柄を称えないわけにはいかない。クレメンティナの純情を重んじ

て、その思いに誠実に応じようとするサー・チャールズを、彼女の一族、ことに、彼女自身が拒否しなければならぬわけは、ただ彼がカトリック教徒でないからである。カトリックとプロテスタントの教義の差はもろろん軽々しいものではなかったであらう。しかし、十八世紀半ばのイギリスの日常生活では、プロテスタントの常識がこの危険な対立的宗派から脅威を受ける心配は、まずなかった。

したがって、クレメンティナがわざわざイタリヤへ呼んだサー・チャールズを諦めると彼自身に告げるときにも、その情景は悲劇的であり、美しい哀感に溢れてはいるが、いわば影絵にひとしい。ハリエットの待つ彼の現実生活をおびやかすはしない。クレメンティナの「自負」はサー・チャールズの「自負」と現実面で衝突することがないのである——

But did I not tell you that I have pride, chevalier? Ah, sir, you have long ago found it out! Pride will do greater things for women than reason can—Let us walk to that seat, and I will tell you more of my pride. (III, Letter LXVI.)

サー・チャールズはたしかに「誇り」を持っている。それも、父親譲らしい。彼は母の兄W——卿に会って、それを自認する——

You say well, said my lord: but I am afraid, kinsman, by your air and manner, and speech too, that you want not your father's proud spirit.

I revere my father for his spirit, my lord. It might not always be exerted as your lordship, and

his other relations might wish : but he had a manly one. As to myself, I will help your lordship to my character at once. I am, indeed, a very proud man. I cannot stoop to flatter, and least of all men, the great and the rich : finding it difficult to restrain this fault, it is my whole study to direct it to laudable ends ; and I hope, that I am too proud to do anything unworthy of my father's name, or of my mother's virtue. (I, Letter LXIX.)

サー・チャールズの「誇り」はその社会的地位にたいする関心に根ざすに相違ないが、自己の独立を念願する気持から、それを人格的ないし道徳的長所に高めようと努めている。彼は父の「名誉」と母の「美德」(サー・チャールズの母は貴族の娘であるが、兄に似ず、淑徳が高かったことになっている。作者の中流的な女性尊重の現われであろう)を結合した人間として、設定されているのである。したがって、彼が父を思って、自分の「誇り」を反省するとき、それがむなしく崩れやすいことを悟らないわけにはいかない。ハリエットにこんなことをいう——

In a word, all my father's steps, in which I could tread, I did ; and have chosen rather to build upon, than demolish his foundations.—But how does my vanity mislead me ; I *have* vanity, madam ; I have pride, and some consequential failings, which I cannot always get above . . . (IV, Letter VIII.)
財産、身分ともにサー・チャールズに劣るハリエットは、かえって、歪んだ「誇り」を持つことを自覚する。サー・チャールズの妹シャーロット (Charlotte. Lord G—と結婚している) にあてた手紙のなかで、彼女はいつてい
る——

As to your brother, What, my love, shall I do with my *pride*? I did not know I had so much of that bad quality. My poverty, my dear, has added to my pride. Were my fortune superior to that of your brother, I am sure I should not be so proud as I now, on this occasion, find I am. (III, Letter LXXXVIII.)

しかし、彼女はサー・チャールズを崇拜しているのである。自分の「誇り」などは「むら氣」にすぎないことを認めないわけにいかない——

Can you, Lady G—, forgive my pride, my petulance? (III, Letter XC.)

この“petulance”という語は“pride”と並べ、*“prejudice”* のように「心理の歪みを示すばかりでなく」頭韻を重ねることになる点ではなほだ興味深いが、快活な、才氣煥発な、ときに「いささか撥ねつ返りな言動をさへ示すシャーロットが、みずからその性質を認める個所がある。サー・チャールズが彼女に求婚者G——卿と早く結婚せよとすすめたとき、彼女は次のように姉にいう——

What a deuce, to be married to a man in a week's time, with whom I have quarrelled every day for a fortnight!—Pride and petulance must go down by degrees, sister. A month, at least, is necessary, to bring my features to such a placidness with him, as to allow him to smile in my face. (II, Letter LII.)

シャーロットは「完全な男性」である兄を、ハリエットに劣らず崇拜しているのである。この“petulance”は、卿にたいする気持のふざけた自嘲ではあるとしても、また、ひとつには、サー・チャールズの人格に圧倒された

余りの無力な反抗であろう。少くとも、作者はそのつもりでシャーロットにこの語を使わせたに相違ない。

ジェイン・オースティンはリチャードソンを愛読したが、ことに、『サー・チャールズ・グランディソン』を好み、その物語を知悉していたことである。⁽⁷⁾彼女の小説——この場合、問題は『自負と偏見』であるが、それがリチャードソンから、特に、この作品から、かなりの影響を受けたと考へても、誤りではないであろう。『自負と偏見』が『セシリア』の「写実的な書き直し」であり、女主人公エリザベス・ベネットがセシリアを裏返した人物であるとしても、セシリアの性格は遠くリチャードソンに発している。そればかりでなく、「美德」を表わすしとやかなハリエットを女主人公とする『サー・チャールズ・グランディソン』に、すでに、シャーロットというその性格の逆転が描かれている。いや、『クラリサ』のなかにさえ、謹厳な女主人公と対照的な、快活なハウ嬢が描かれている。シャーロット・グランディソンの性格はハウ嬢の継承である。⁽⁸⁾

クラリサ——ラヴレイスの悲劇と、クレメンティナ——サー・チャールズの悲劇は、人生理解の型として同様な構造を示しているが、『サー・チャールズ・グランディソン』の物語は、先にいったように、ハリエット——サー・チャールズの喜劇がその本筋であろう。とにかく、クラリサからハリエットへ、それからセシリアへ、そして——ジェイン・オースティンが『ハムズブロング』を読んだという明かな証拠はないが、この文学史上の系譜のなかへそれに加えるなら、キャンピネット嬢へと、引き続き人間造形の型は、『自負と偏見』の女主人公エリザベスでなく、ジェイン・ベネットにつながり、ハウ嬢——シャーロット・グランディソンの系列が、『セシリア』中の快活な令嬢レイ

ディ・ペンバトン (Lady Pemberton)⁽¹⁰⁾ から、『ハームズブロング』の同じく快活な才女フルアート嬢 (Miss Fluart) を経て、エリザベスにつながっているようである。そして、その伝承のなかで、『自負と偏見』にうかがわれる最も特徴的なオースティンの創作は、ここで脇人物が女主人公の位置に入れかえられたことであろう。

とすれば、リチャードソン以来の小説に現われた人間的属性の一つの型である「自負」ないし「誇り」を考えると、エリザベス・ベネットはことさらに興味深い性格だといわなければならないまい。

二

『自負と偏見』のなかにも、実際、たびたび“pride”と“prejudice”という語が使われている。が、それら二語が併記された例は見当らないようである。ただ、それらが別々にはあるが、同じ人物について、相続いて併立的に使われた個所がある。

三、⁽¹¹⁾に、女主人公エリザベス (Elizabeth Bennet) が叔父ガーディナー (Gardiner) 夫婦に連れられて、ダーシー (Darcy) の邸ペンバリーをおとすれることが述べられているが、そのとき、家政婦のレノルズ夫人 (Mrs. Reynolds) が得意げに主人ダーシーの噂をする——

Mrs. Reynolds, either from pride or attachment, had evidently great pleasure in talking of her master and his sister.

その一ページほど先に、次のようにある——

Elizabeth listened, wondered, doubted, and was impatient for more. Mrs. Reynolds could interest her on no other point. She related the subject of the pictures, the dimensions of the rooms, and the price of the furniture, in vain. Mr. Gardiner, highly amused by the kind of family prejudice, to which he attributed her excessive commendation of her master, soon led again to the subject; and she dwelt with energy on his many merits, as they proceeded together up the great staircase.

この“pride”と“prejudice”の観念は互いに補足的であり、その使用が『セシリア』以来の用例にひとしいことは明かである。が、また、興味深いことに、そのいずれもがダーシー家の主人ののではなく、彼の召使に反映した風性である。その間接さによって、一種の諧謔味を漂わせる。なお、少し気をつけて読めば、レノルズ夫人の「自負」を誰が感じるのかは、多少あいまいな含みを持たせて表現されているが、彼女の、したがって、また、ダーシー家の「偏見」を感じる役割が、エリザベスでなく、ガーディナー氏に与えられていることが分る。この個所の叙述はエリザベスの関心を問題にしているはずでありながら、ここで視角が転じる。ガーディナー氏が彼女の身内である限り、いわば半転するのである。

この章は、ダーシーにたいするエリザベスの気持ちに大きな発展が生じて、彼女（人間）の個我的展開が行われる、重要な個所である。右の「諧謔味」ないし「半転」がどれだけ意識的な技法であるにもせよ、その屈折的な効果はまったく特徴的だといってもよいであろう。

全篇を通じて、必ずしも排他的にダーシーが「自負」を、エリザベスが「偏見」を示しているわけではない。しか

し、もちろん、はじめにいったように、この作品は『セシリア』その他と違って、基本的には、それら二つの觀念が二人の主要人物に具現され、その葛藤によって筋が発展することになっている。

ベネット家の生真面目な第三女メアリー (Mary) が次のようにいふとき――

Vanity and pride are different things, though the words are often used synonymously. A person may be proud without being vain. Pride relates more to our opinion of ourselves, vanity to what we would have others think of us. (I, V.)

この人物が「人間」でなく、陳腐な「性格」の諷刺であり⁽¹²⁾、したがって、その提言が単にありふれた教訓書のパロディであつたにもせよ、それは第九章のエリザベス (人間) とダーシーの、次のような会話に呼応するものであろう――

“But it has been the study of my life to avoid those weaknesses which often expose a strong understanding to ridicule.”

“Such as vanity and pride.”

“Yes, vanity is a weakness indeed. But pride—where there is a real superiority of mind, pride will be always under good regulation.”

たしかに、立派な家柄に生まれたダーシーの「自負」と「むなしい誇り」の関連は、この作品のなかでも、サー・チャールズの場合のように、ただの冗談話ではない。エリザベスはダーシーの従弟から彼がジェーン (Jane Bennet)

とビングリー(Bingley)の仲を割いたと聞いたとき、次のように思うのであるが、それはダーシーの社会的地位の「誇り」にたいする反撥ばかりでなく、その人格に関する疑いでもあった(したがって、それがはれたとき、「人間」を見る彼女の目がひときわ明るく、そして、深くなるのである)――

If his own vanity, however, did not mislead him, *he* was the cause, his pride and caprice were the cause of all that Jane had suffered, and still continued to suffer. (II, X.)

ダーシーは立派な家柄の男である。自身貴族ではないが、母はサー・チャールズ・グランディソンの母のように貴族の娘である。彼がその社会的地位に「誇り」を感じたとしても、むしろ当然であろう――

“His pride,” said Miss Lucas, “does not offend *me* so much as pride often does, because there is an excuse for it. One cannot wonder that so very fine a young man, with family, fortune, every thing in his favour, should think highly of himself. If I may so express it, he has a *right* to be proud.” (I, V)

なお、この個所と並んで、ダーシーの“pride”が特にきわ立った形で問題にされる一、十六でも、それは基本的に彼の社会的立場にたいする「自負」のことなのである。⁽¹³⁾

ダーシーの“pride and caprice”をエリザベスが彼の人格の欠点と感じる気持については、右に述べた通りであるが、この二語の併列は、“pride and prejudice”とひとしく、“pride”という觀念の敷衍的な説明であろう。⁽¹⁴⁾ そうですね、同様に、“pride”を他のいっそう意味の明白な、あるいは、一面的な語と並べた句がいくつかある。たとえば、ダーシーについても、彼が自分の行動の弁明をした手紙を、エリザベスが読んだときに、次のようにある――

He expressed no regret for what he had done which satisfied her; his style was not penitent, but haughty. It was all pride and insolence. (II, XIII.)

エリザベスには、ダーシーの「自負」が人格的な「傲慢」さひとつになっていると思われた、ということであろう。

しかし、ダーシーがエリザベスと理解し合った（その性格の欠点を克服した）のちの、次の例では、彼の育ちが根本的に正しい節操を押し歪めていたことを、彼自身が悟った、という屈折した表現に使われている――

I was given good principles, but left to follow them in pride and conceit. (II, XVI.)

ダーシーの“pride”は終始明らかに目立った性質であるが、それに種々の限定ないし形容をつけた句がある。右に引用した“pride and caprice”のすぐあとに、エリザベスは彼の行動の動機を“this worst kind of pride”だと思ったとあるが、彼がリディア (Lydia Bennet) とウィカム (Wickham) の結婚に尽力したことを報せるガーディナー夫人の手紙中には、ダーシーがリディアの不始末の原因を自分の“mistaken pride”に帰したとあり(三、十)、エリザベスはダーシーとの婚約について父に誠意を疑われたとき、彼が“improper pride”を持ってはいない、という(三、十七)。

ダーシーの「自負」の解釈ばかりでなく、対人関係におけるその意味も次第に変化する。いいかえれば、彼はエリザベスとの接触によって、その「自負」の質を転換させる。そして、人間的に向上するのである。

エリザベス・ベネットも、また、“pride”を持っている。ダーシーにたいして、サー・チャールズにたいするハリ

エットのように、社会的地位が劣るために、逆説的な「誇り」を抱く。ダーシーの「自負」は当然だとシャーロット・ルーカスがいったとき、エリザベスは答える――

“That is very true,” replied Elizabeth, “and I could easily forgive *his* pride, if he had not mortified *mine*.”

が、彼女はハリエットがサー・チャールズを崇拜するように、ダーシーを崇拜するわけにいかない。その「誇り」は反抗の姿勢をとる。しかも、彼女の快活さはサー・チャールズにたいするその妹シャーロットの場合とは違って、地位の劣った他所者の虚勢と見える。ビングリー嬢が彼女の悪口をいうのは、必ずしも見当違いではないのである――

Her manners were pronounced to be very bad indeed, a mixture of pride and impertinence... (I, VIII.)

しかし、エリザベスの「生意氣」さはただ社交的な風習の逸脱に止どまらない。ダーシーの「むなしい誇り」を打破すべき積極性を持っている。したがって、彼がその歪んだ「誇り」を、結局、包容することができたとき、二人はふざけながら、いいかえれば、逆説的に「真面目に」、彼女のいわゆる「生意氣」さを論じ合って、自身を祝福することになるのである。エリザベスがきく――

Now be sincere; did you admire me for my impertinence? (III, XVIII.)

ダーシーは答える――

『自負と偏見』

For the liveliness of your mind, I did.

“prejudice” という語は “pride” ほど意味の中が広くなく、作中にさほど用例が多くない。が、右に述べた “pride” と関連して、つけ加えれば、エリザベスの「偏見」は「誇り」の裏返しである。彼女がダーシーの手紙を読んだときの、次の叙述は、客観的筆致に相違ないが、その「偏見」が崩れ去るときであるから、ことに、含みの多い意味を持つていると云ってよいであらう——

With a strong prejudice against every thing he might say, she began his account of what had happened at Netherfield. (II, XIII.)

げんに、その少し先にある次の個所で、エリザベスは自分の心理の歪みを発見しているのである——

Of neither Darcy nor Wickham could she think, without that she had been blind, partial, prejudiced, absurd.

一方、ダーシーも、当然、「自負」に伴う「偏見」を持っている。先に述べたエリザベスとウィカムとのダーシーの「自負」についての問答（一、十六）から二章あとに、エリザベスとダーシーが舞踏会で話し合うとき——

“And never allow yourself to be blinded by prejudice?”

“I hope not.”

エリザベスがウィカムからダーシーの中傷を聞いたあとだけに、この “prejudice” という話は複雑な二重の意味を持ち、はなはだアイロニカルである。作品の基調と趣旨を象徴しているようにさえ思われる。

三

『自負と偏見』の内容はダーシーの「自負」とエリザベスの「偏見」の葛藤である。が、その主題は、一言でいえば、結婚——単に彼らの個人的な結婚の経緯というよりも、一般に、結婚問題である。

物語の冒頭にある次のような言葉——

It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.

は、ふざけたもののいいかたに相違ないが、実は、決していい加減な冗談でない。若い女性の人格的独立は結婚の制度に保証されるほかになく、それには、社会的・経済的条件が整わなければならない、という主張である。根本的に、小説文学の創始以来——『パミラ』以来の、最も重要な人生問題の提示である。⁽¹⁵⁾

また、全篇を締めくくる次の言葉——

With the Gardiners, they were always on the most intimate terms. Darcy, as well as Elizabeth, really loved them; and they were both ever sensible of the warmest gratitude towards the persons who, by bringing her into Derbyshire, had been the means of uniting them. (III, XIX.)

は、エリザベスとダーシーの結婚による当事者の人格的な「結合」ばかりでなく、それに伴う、あるいは、それを支える彼らの環境の幸運な人間関係の意義を主張したものであろう。

ジェイン・オースティンは、小説家リチャードソンからどんな影響を受けたにもせよ、十八世紀後半を代表する文人であり「良識」の具現者であったジョンソン博士 (Samuel Johnson, 1709-84) に私淑してあり、⁽¹⁶⁾ ことに、彼の物語というよりも、むしろ、人生論である『ラセラス』(Rasselas, 1759) を、愛読していたようである。この作品には有名な結婚論が含まれているが、⁽¹⁷⁾ たとえば、そこに次のような言葉がある——

I cannot forbear to flatter myself that *prudence* and benevolence will make marriage happy. The general folly of mankind is the cause of general complaint. What can be expected but disappointment and repentance from a choice made in the immaturity of youth, in the ardour of desire, without judgment, without foresight, without enquiry after conformity of opinions, similarity of manners, rectitude of judgment, or purity of sentiment. (Chap. XXIX. *italics mine*)

『自負と偏見』のなかで、最初に「思慮分別」を働かして結婚する女はシャーロット・ルーカスである。彼女とコリンズ (Mr. Collins) との結婚について、エリザベスと姉ジェインが話し合うとき、エリザベスがシャーロットの行動を非難する。ジェインがこう——

Consider Mr. Collins's respectability, and Charlotte's *prudent*, steady character. Remember that she is one of a large family; that as to fortune, it is a most eligible match... (II, I. *italics mine*)
が、エリザベスはその弁護を承認しない——

You shall not, for the sake of one individual, change the meaning of principle and integrity, nor

endeavour to persuade yourself or me, that selfishness is *prudence*, and insensibility of danger, security for happiness. (*italics mine*)

シャーロットはもっぱら実生活の経済的な安定を目差しているにすぎず、その「思慮分別」はもちろんジョンソンふうの高邁さを持っていない。しかし、女性の人格的独立を保証すべき「結婚」が、経済的条件をまっぴらして成立するのである限り、シャーロットの考えはいわば非人格的ながら、かえってまったく堅実なのである。彼女の“prudence”はジョンソンの観念の裏返しであり、その一種のパロディーであらう。

また、ガーディナー夫人がエリザベスとウィカムの関係を心配して、次のように忠告したとき――

Do not involve yourself, or endeavour to involve him in an affection which the want of fortune would make so very *imprudent*. (II, III. *italics mine*)

夫人は結婚における「思慮分別」が、実は、経済的顧慮にすぎないことを告白したわけである。したがって、そののち、エリザベスが次のように逆襲するとき――

Pray, my dear aunt, what is the difference in matrimonial affairs, between the mercenary and *prudent* motive? Where does discretion end, and avarice begin? Last Christmas you were afraid of his marrying me, because it would be *imprudent*; and now, because he is trying to get a girl with only ten thousand pounds, you want to find out that he is mercenary. (II, IV. *italics mine*)

そのとげとげしい語気は、「分別」の諷刺であるとともに、現実のなまなましい批判でもあつた。

エリザベスとダーシーの結婚も、当然、まず、その社会的・経済的な条件が問題になる。レイディ・カサリン (Lady Catherine) がその反対を表明するために、わざわざバネット家を訪れて、エリザベスに、

Because honour, decorum, *prudence*, nay, interest, forbid it. (III, XIV. italics mine)

というが、この上流気取りの婦人は「名誉」にかけて問題を単に経済的にのみ考えまいとしているとしても、彼女から見れば、社会的地位の釣合わぬ縁組を望むダーシーはもとより、エリザベスもまた、「無分別」に相違ない。

が、エリザベスを愛するガーディナー夫人は、彼女とウィカムの関係では「分別」と「損得勘定」の区別をつけかねたにせよ、ダーシーとの関係では、問題を正しく「人間的」な次元で考えることができた。ダーシーがリディアとウィカムの結婚の成立に奔走したことを、エリザベスに伝える手紙のなかで、夫人は次のようにいっている——

His understanding and opinions all please me; he wants nothing but a little more liveliness, and

that, if he marry prudently, his wife may teach him. (III, X.)

ここで、夫人は“prudent”という言葉のしゃれを筆にしたのであるが、ジョンソンふうの「分別」が、冗談めかしてアイロニカルに、しかし、また、そのためにかえって実質的に、主張されている、といつてよいであろう。

コリンズは生きた人間の写実などではない。エリザベスとダーシーの「自負」と「偏見」のあいだに挟まって、その関係を「結婚」にまで発展させるからくりの一つである。彼自身がけちな「自負」なのである。一、十五に、彼の性格を規定して、“a mixture of pride and obsequiousness”だとある。実際、彼は「人間」でない。「礼状」という意味の普通名詞“Collins”がこの人物から生じたことはよく知られているが、興味深いことに、彼の手紙の具体

的な実例（一、十三。三、六。三、十五）は、どれも「礼状」ではない。彼の“letter of thanks”が、たしかに、三度作中に一言されるが（一、二十二、二十三。二、二）、それがこの人物の印象を表わす最大公約数的な観念になったことは、創作の奇妙なアイロニーを証するばかりでなく、そもそも、この「人物」の端役的な機能に由来するに相違ないのである。

しかし、コリンズはエリザベスの求婚者として十分な社会的条件をそなえている。エリザベスが彼の求婚を断ったとき、彼はそんなはずがないといい、その理由として、自分の地位、ド・バーク（De Bourgh）家との関係、ベネット家との因縁、エリザベスの婚資が少いことなどをあげているが（一、十九）、それはまさにその通りだといわなければならぬ。人間、すなわち、個性を無視する限り、彼らの結婚はまったくめでたいことなのである。したがって、その後、エリザベスがある意味で玉の輿に乗ることになるダーシーの求婚を受ける——しかも、二度彼の求婚を受けることを考えれば、彼女が断乎として、コリンズに、

I do assure you that I am not one of those young ladies (if such young ladies there are) who are so daring as to risk their happiness on the chance of being asked a second time.

と宣言する言葉は、それがどう当時の文学的因襲にあてつたものであったにもせよ、とにかく、エリザベス——ダーシーの結婚問題のアイロニカルな投影であろう。いや、その一種の予想的弁明かもしれない。

先に述べたように、シャーロット・ルーカスは結婚における「思慮分別」の実践家であるが、ジョンソンの所説を逆転して、

Happiness in marriage is entirely a matter of chance. If the dispositions of the parties are ever so well known to each other, or ever so similar before-hand, it does not advance their felicity in the least. They always continue to grow sufficiently unlike afterwards to have the share of vexation; and it is better to know as little as possible of the defects of the person with whom you are to pass your life.
(I, VI.)

といい、それを実行して、コリンズと結婚するとき、その行動はあらかじめ十分計量されていたのであり、「若気の過ち」などではない。シャーロット——コリンズの結婚はエリザベス——コリンズの結婚の可能性を手荒く実現させてみた見取り図である。そして、その意味で、ひいては、エリザベス——ダーシーの結婚が成立する条件の一つを提示し、検討したのである。

しかし、エリザベスがダーシーと結ばれる前に、彼女はいま一つ大きな試練を経なければならない。それはウィカムとの関係である。

コリンズが登場するのは、一、十三であるが、その二章あとにウィカムが現われる。このタイミングはもちろんはつきり計画的に相違ない。コリンズの容姿——

He was a tall, heavy looking young man of five and twenty. His air was grave and stately, and his manners were very formal.

と、ウィカムの容姿——

His appearance was greatly in his favour ; he had all the best part of beauty, a fine countenance, a good figure, and very pleasing address.

とは、対照的であり、一、十六で、彼らが同席したとき、コリンズは取るに足りない人物のように見える。

...to the young ladies he certainly was nothing...

とあるが、この「若い婦人たち」のなかには、当然エリザベスも含まれるはずである。

結婚が若い男女の結合である以上、そのいわば感覚的条件が考慮に入らないわけにいかない。ジェイン・オースティンは人間の性的要素を隠蔽したといわれ、普通の意味では、たしかにそうに違いない。が、ここで、ウィカムの男性的魅力が、抑制された筆致ではあるが、はつきり、コリンズのぶざまさと対照されている。先に述べたように、エリザベスとガーディナー夫人とがウィカムについて“prudence”を論じるとき、エリザベスの逆襲のとげとげしさは、コリンズを下敷きにしたウィカムの「男」にたいするエリザベスの「女」らしい、性的な——とはいえないかもしれない、が、少くとも、感覚的な反応に裏づけられているように見える。

しかし、エリザベスは「若気の過ち」に陥らず、それを踏み越える。そして、感覚に溺れる役割は、コリンズにたいするシャーロット・ルークスの「思慮分別」の場合とひとしく、代償的に、彼女の妹リディアに——メアリーと同じく、エリザベスの妹らしからぬリディアに、与えられている。リディアはシャーロットやメアリーと同様に、「人間」でない。物語の筋を発展させる機能であり、性格のパロディーである。⁽¹⁹⁾

ダーシーは門地の高い家柄に生まれ、裕福であるばかりでなく、彼自身の個人的な長所を持っている。美男子なの

である。一、三の舞踏会に、彼がはじめて姿を現わすとき、

Mr. Darcy soon drew the attention of the room by his fine, tall person, handsome features, noble mien...

しかし、その「傲慢」さのために人々の反感を招き、“disagreeable countenance”だと思われたというのである。が、右に引用したウィカムの“pleasing”な物腰と同じく、この“disagreeable”という形容が多分に主観的である限り、その印象はやがて変化する。

ペンバリーでガーディナー夫妻とエリザベスが彼に会ったとき、ガーディナ夫人が彼とウィカムを比べて、いうように――

“To be sure, Lizzy,” said her aunt, “he is not so handsome as Wickham; or rather he has not Wickham’s countenance, for his features are perfectly good. But how came you to tell us that he was so disagreeable?” (II, 1.)

ダーシーの容姿はウィカムのと違って、なまなましく女性の感覚に訴えないとはしても、ここで、少くとも、彼らにとって「不愉快」ではない。彼は女性にとって快い感覚的な実体の可能性を持ち、それをエリザベスとの関係によって実現するのである。

実際、ダーシーが単に抽象的な立派な人間でなく、感覚的な肉体を持っていることを暗示しようと、叙述に細心の工夫がこらされている。右に引用した一、三に、はじめて彼の「背が高い」ことが述べられてから、数章あとにまた、

それが具体的な生活の場の映像として繰り返される。ビングリーがいう——

I assure you that if Darcy were not such a great tall fellow, in comparison with myself, I should not pay him half so much deference. I declare I do not know a more awful object than Darcy, on particular occasions, and in particular places; at his own house especially, and of a Sunday evening when he has nothing to do. (I, X.)

コリンズの「背の高い」ぶざまさにたいして、ダーシーの重厚な人柄が人に（この場合、女にではないが）与える印象が、この「背の高い」という形容によって、いかにも鮮やかに浮かび上る。

また、エリザベスがダーシーとの婚約を母に告げたとき、たあいもなく母が叫ぶが——

Such a charming man; — so handsome! so tall! (III, XVII.)

この愚鈍な婦人は、男の「美貌」に直接な反応を示しながら“charming”という形容詞をでまかせに口にしているのである。が、そのために、彼女の叫び声は、彼女（女）にとって否応なく、ダーシーが「背の高い」男であることを、不思議な真実感を以て印象づける。

ダーシーは女主人公（個性）エリザベスの相手となるにふさわしい装いがこらされ、したがって、その性格は、作中の他の人物にないほど、微妙なふくらみと変貌を示すのである。⁽²⁰⁾

ところで、エリザベスはダーシーとの結婚を決意する前に、なおもう一つ「男女」関係のしこりを解きはごさなければならぬ。彼女は父親ベネット氏にたいして異常な——精神分析の用語を使えば、「エレクトラ・コンプレック

「ス」的な、親愛感を抱いている。二、十四で、レイディ・カサリンがエリザベスに「お母さんがあなたを手もとから放せるのなら、お父さんはもちろんそうなされるでしょう」という言葉が、当時の一般的な父娘関係の実情である限り、彼女とベネット氏の「異常」な関係は、決して偶然ではあるまい。ベネット氏の夫婦生活の失望が反射的に彼女にひきつけるのだとするなら、その「失望」の原因がベネット夫人の精神的欠陥にあった(二、十九)とはしても、そのために、この父娘は、事実上、恋人同志じみた愛情で結ばれているのである。

それを「性的」といっては、いすぎかもしれない。しかし、エリザベスが「男」ダーシーと「結婚」して、女性の人間的独立を成就させるための、逆説的な条件として、その「コンプレックス」的な心理の倒錯を、右のような情況のうちに、作者はたとえ無意識にはあっても設定したのだ、といってもよいように思われる。

なお、エリザベスに、両親の日常が結婚生活の望ましくならぬ標本と見えたとしても(二、十九)、その原因である愚鈍な母は、皮肉にも、立派な人柄の弟を持っているばかりでなく、夫人もまた物分りがよく、彼らはある意味で理想的な夫婦である。先にいったように、ガーディナー夫妻が期せずしてエリザベスとダーシーの結婚の仲立ちをすることになる以上、それは明らかに作者オースティンの意識的な設定であろうと思われる。そして、この場合、最も重要なことは、ガーディナー氏が商人だということであろう。

ガーディナー氏は「分別のある紳士らしい男であった」(一、二)とあるが、商人に「紳士」(gentleman)の品性を見出して、その人格を女主人公の生命に絡ませながら物語った点で、商人と結婚して家門を傷つけたと叔母をよせつけぬ「誇り」を弾劾した『ハムズブロング』などよりも、ここにいつそう具象的に、すなわち、小説的に、新しい

人間的価値の主張がうかがわれる。

四

先に述べたように、エリザベス・ベネットの造形は必ずしも斬新ではない。その系譜は小説文学の創始者リチャードソンまでさかのぼることができる。彼女の風儀が“mixture of pride and impertinence”だと作中の人物にいわれることを先に一言したが、たしかに、その物腰はしとやかでない。が、そのために、かえって男の心を捕える事情が、次のように説明されている。文中の“him”とはダーシーを指すのである——

Elizabeth, having rather expected to affront him, was amazed at his gallantry; but there was a mixture of sweetness and archness in her manner which made it difficult for her to affront anybody; and Darcy had never been so bewitched by any woman as he was by her. (I, X.)

ここにまた、“a mixture”、という言葉が使われているが、それは彼女の「性格」が種々な要素から成り立っていることを、いいかえれば、複雑な「個性」であることを、印象づけようとしたのであろう。で、人間の「個性」が真に「合成」といってよいものかどうかはとにかく、サー・チャールズの妹シャーロットも同じく下種っぽくはないお転婆娘であったのである——

...and a *modest archness* appears in her smiles, that makes one both love and fear her, when she begins to speak. (I, Letter XXXVI. *italics mine*)

したがって、また――

Miss Grandison has a way of saying ill-natured things in such a good-natured manner, that one cannot forbear smiling, though one should not altogether approve of them. (II, Letter XV.)

ところで、エリザベス・ベネットの人物像がどれだけ直接にシャーロット・グランディソンから影響を受けたにもせよ、彼女の構想は基本的に十八世紀ふうな性格造形の型に基づいている。エリザベスは何にもまして大きな興味を人間にたいして抱いている。同じ社会の生活の主体である「人間」を観察する彼女の目は、生の肯定から、その生への参加を促し、結局、自己を規定し、形成するのであるが、“a studier of character” (I, IX) とされるその特質は、

“...my business is with man.” (*Rasselas*, Chap. XXX.)

と主張するラセラスの、したがって、ジョンソンの健康な生活意慾にひとし。

エリザベスはコリンズとシャーロット・ルーカスとの打算的な愛の取り引きに失望し、ビンググリーがジェインを棄てた無気力に腹を立て、ウィカムが損得ずくの男である真相を垣間見て落胆したとき、叔母ガーディナー夫人から湖水地方への旅に誘われて、思わず、

Adieu to disappointment and spleen. What are men to rocks and mountains? (II, IV.)

と叫ぶのであるが、それはもちろん人間性にたいする信頼の真の喪失でなく、そのような見せかけを揶揄する、あるいは、少くとも、それが「見せかけ」であることを読者に納得させようとする作者の意図が感じられる。

ジョンソンの『アイズラー』(The Idler, 1758—60) 第九十七号に、旅行記作者を評して、

Thus he conducts his reader through wet and dry, over rough and smooth without incidents, without reflection: and, if he obtains his company for another day, will dismiss him again at night, equally fatigued with a like succession of rocks and streams, mountains and ruins.

とあるが、オースティンは右の言葉を書きつけながら、それを思い浮べていたのかもしれない。⁽²²⁾ あるいは、また、當時有名であったギルピン (William Gilpin, 1724—1804) の湖水地方の旅行記⁽²³⁾を揶揄する意図がこもっていたのかもしれない。とにかく、右のエリザベスの言葉は妙にヒステリカルであり、きわ立って文脈から浮かび上るのである。

ところが、その楽しみの種――

Her tour to the Lakes was now the object of her happiest thought... (II, XIX.)

は、ガーディナー氏の仕事のために、実現しない。一同は旅程を切りつめて、ダービーシャまでしか行けないことになる。⁽²⁴⁾そして、その結果、エリザベスはダーシーの邸ペンバリーで思いがけなく彼に出会って、二人の相互理解が深まるのであるが、この大きなアイロニーは物語の発展を押し歪める作者の強引な筆のすべりだというよりも、『自負と偏見』の基調そのもの――「自然」でなく「人間」に興味を抱く女主人公の性格にふさわしい人生のアイロニーであらう。

エリザベス・ベネットはアイロニカルな人物である。先にいったように、彼女は本来いわゆる「女主人公」らしい位置におかれる人柄ではない。彼女の役割はここでジェイン・ベネットのと入れかわっているのである。⁽²⁵⁾彼女は決して

てしとやかな美人などではない。少年のようになりふりかまわず急ぎ足で歩いたり、走ったりする（一、七。三、七）ばかりでなく、その容姿は、ビングリー嬢によれば、

Her face is too thin; her complexion has no brilliancy; and her features are not at all handsome. Her nose wants character; there is nothing marked in its lines. Her teeth are tolerable, but not out of the common way; and as for her eyes, which have sometimes been called so fine, I never could perceive anything extraordinary in them. They have a sharp, shrewish look, which I do not like at all; and in her air altogether, there is a self-sufficiency without fashion, which is intolerable. (III, III.)

この描写は嫉妬に目のくらんだでたらめな罵倒ではないようである。女が好意を持たない女にたいする意地の悪いあら探しには相違ないが、とにかくはつきり一個の女性像が、いや、男（ダーシー）をなかに挟んだ女対女の生活的な人間関係を背負う映像が、鮮やかに浮かび上る。

ビングリー嬢が語るエリザベスの風貌のうちで、最も興味深い項目は、“sharp, shrewish look”を持った目であろう。彼女の目は、それがビングリー嬢にどんなに野卑に見えようと、「黒い聡明な」特徴によって、最初からダーシーの心を捕えるのであるが――

But no sooner had he made it clear to himself and his friends that she had hardly a good feature in her face, than he began to find it was rendered uncommonly intelligent by the beautiful expression of her dark eyes. (I, VI.)

そのどちらの印象もひとしく真実感を帯びている。エリザベスという女の肉體的な迫力の象徴のように見える。

それが作者の意識的な「象徴」であるにせよ、ないにせよ、その特徴、すなわち、「黒い」と「聡明そうな」ことは、必ずしもオースティンの創案ではないであらう。⁽²⁸⁾とすれば、とにかく、その目が個性的な強い迫力を持っているわけは、いったいなぜであらうか。

エリザベスの容貌がジェイン・オースティンの甥の伝える彼女自身の容貌——

In person she was very attractive; her figure was rather tall and slender, her step light and firm, and her whole appearance expressive of health and animation. In complexion she was a clear brunette with a rich colour; she had full round cheeks, with mouth and nose small and well formed, bright hazel eyes, and brown hair forming natural curls close round her face. (*Memoir*, Chap. V.)

と、なんらかの関係があるとしても、⁽²⁷⁾その事実は創作のメカニズムの解明にはならないかもしれない。しかし、始終笑っているエリザベスが、泣き出すとき、ことに、ダーシーとの婚約を聞いた父が彼女の誠意を疑ったときに、その「目に涙をためて」自分の愛を主張するエリザベスの風貌は——

“I do, I do like him,” she replied, with tears in her eyes, “I love him...” (III, XVII.)

この不思議な強い真実感は作者自身の実生活の映像と無関係ではないように見える。いいかえれば、創作における現実の仮象的な装いのアイロニーを、暗示しているように見える。

(1) ジェインの姉カサンドラの覚え書きによる。その写真版が *The Works of Jane Austen*, Vol. VI “Minor Works,”

ed. by R. W. Chapman に掲げられてゐる。

(2) cf. *The Novels of Jane Austen*, Vol. II, ed. by R. W. Chapman, Appendixes, "*PRIDE AND PREJUDICE* and *CECILIA*."

(3) Q. D. Leavis: "A Critical Theory of Jane Austen's Writings" (*Scrutiny*, X, 1.)

(4) (5) "*PRIDE AND PREJUDICE* and *CECILIA*"

(6) リチャードソン引用 *The Works of Samuel Richardson*, with a Prefatory Chapter of Biographical Criticism by Leslie Stephen のテキスト参照。

(7) cf. Henry Austen: "Biographical Notice of the Author," prefixed to *Northanger Abbey* and *Persuasion* (1818). J. E. Austen-Leigh: *Memoir of Jane Austen*, Chap. V.

(8) *Sir Charles Grandison*, I, Letter XLVI に "シャーロム・グランドイシオンをハウ嬢にたづねた箇所"あり。

(9) チャップマン編の全集第五巻の索引 "I Of Literary Allusions" と第六巻の索引 "IV Authors and Books" に、また同じくチャップマン編の書簡集の索引 "V Authors, Books, Plays" に、それぞれ『ペーリス・ペンロン』の名は出ていない。

(10) チャップマンが指摘しているように Pemberton の各巻『自負と偏見』のダーシーの語 Pemberton の類似は偶然ではなからう。cf. "*PRIDE AND PREJUDICE* and *CECILIA*"

(11) チャップマン編の全集本(初版の翻刻)の区分による。第一巻が二十三章、第二巻が十九章、第三巻が十九章ある。それらの各巻の分けかたは物語の展開の上から細心に計画されてゐるのである。註(24)参照。

(12) cf. Q. D. Leavis, *op. cit.*

(13) 一、十六の「エリザベスとウィカムの会話のなかでわずか半ページほどに「pride」と「proud」という語が十度近く出る。

(14) この場合の「pride and caprice」と『ハイムズ・トロンク』中の「pride, prejudice, or caprice」という句との類似は、ただの偶然であろうか。

(15) cf. Ian Watt: *The Rise of the Novel*, Chap. V.

(16) cf. "Biographical Notice," *Memoir*.

(17) 『マンスフィールド・パーク』の三、八に、『ラセラス』第二十六章中の結婚論に言及した文言がある。

(18) Q. D. Leavis, *op. cit.*

(19) リディアはエリザベスの代りにウィカムと駈落ちして、ベネット一家に迷惑をかけるべき人物として設定されているのである。一、十四に、「コリンズが「フォードアイスの説教」を読んだとき、三ページも進まない先に、リディアが無駄話をし出して、朗読の腰を折ることが記されているが、フォードアイズ (James Fordyce, 1720—96) の *Sermons to Young Women* (1765) の最初から六、七ページ目に、「一人の若い婦人が身持ちを誤ると、その兄弟姉妹がみなどんな立派な振舞いをしても、取り返しのつかぬ迷惑を身内のものにかける」とある。作者ははじめからリディアの役割を予定していたに相違ない。なお、リディアの役割については Marvin Mudrick: *Jane Austen*, Chap. IV を参照。

(20) ただし、この人物の造形は根本的にバロディーないし戯曲である。たとえば、一、十で、彼の「背が高い」ことを述べた個所の一、二ページ前に、「ダーシーはすらすらと文章が書けない、四シラブルの語を使おうと苦心する」とビンググリーがいったとき、その直後にダーシーが話す言葉に、四シラブルの語が頻出する。その個所をチャップマンはジョンソン(ボズウ

ヘル『ジョンソン伝』一七七八年四月二十五日)に参照させてゐるが(*The Novels of Jane Austen*, Vol. II, Notes)の6場合、オースティンはジョンソンの文体を意識して、それを揶揄したものに違ひない。なお Mary Lascelles: *Jane Austen and her Art*, Pt. II, III を参照。

(21) ベネット夫人は本来ベネット氏の結婚生活のでくの棒的な相手という機能を果している。しかも、作中人物として生きていなければならず、そのために、彼女が繰り返して「限嗣相続」の問題を口にする単調な変化が指摘されているが(Mary Lascelles: *Austen*, Pt. II, I, ii) 同様に「その口癖 “nonsense”」が少しずつヴァリエーションを加えた表現で数度繰り返されること(「一、二、十八、十九」)を注意してもよいであろう。夫人は十八世紀ふうの「分別」ないし「無分別」のバロディーだからである。なお、ジェイン・オースティンの“sense”観については、拙稿『分別と多感』——十八世紀ふうの人間観』(「一橋論叢」昭和三十六年十月)を参照。

(22) とにかく、オースティンは『アイドラー』をよく知っていたらしい。『マンスフィールド・パーク』の一、十六に、この作品にたいするきわめて日常的な言及がある。

(23) *Observations, Relative Chiefly to Picturesque Beauty, Made in the Year 1772, On several Parts of England; Particularly the Mountains, and Lakes of Cumberland, and Westmoreland* (1786). viii. この作品の十四節に「エリザベスの言葉をしのはせる叙述がある。なお、前記拙稿を参照。

(24) ここで第二巻が終る。巻末の “To Pemberley, therefore, they were to go.” という言葉は物語の段落を劃する重大なタイミングを告げる。

(25) 『分別と多感』のエリナーとメリアアンが女主人公とその脇役の位置を幾分逆転していることは、半ば無意識であろう。前記拙稿参照。

(26) ハターロニル・ンランヒヤンンヒ “a very penetrating black eye, with which she does what she pleases” (I, Letter XXXVI) ヤヅヅヅナニウケル’ #タ’ ヤニツトニツヅツ “her countenance announced the intelligence of mind...her eyes now beamed with understanding and now glistened with sensibility” (Bk. I, Chap. I) ニケル’ ナヅ’ メノリアン・ダニシヲニル 〇ニツヅヅ “... in her eyes, which were very dark, there was a life, a spirit, an eagerness which could hardly be seen without delight” (*Sense and Sensibility*, I, X) ニケル 〇ニ’ 眼梨ハニ’ 夢
ではあるが。

(27) ジェイン・オースティンの目は「黒く」なかったらしい。が、カサンドラが描いたという彼女の肖像(国民肖像画廊蔵)は、鋭い大きな目が特徴である。